



ほしいもの
役立つものが
必ず見つかる

カタログご請求ください。

かわらばん 第124号
2021年10月号

優秀花に導く肥料調整と蕾の選定

こうすれば らく・楽できる肥料調整

定植後に肥料を与えすぎたり、チッ素分の多い肥料を使いすぎたりすると、結果的にチッ素が多すぎ、チッ素過剰の生育をしてしまいます。

この状態で花を咲かせても、思うような花は咲きません。そこで、この余分なチッ素分は消化させておく必要があります。

この作業が“肥料調整です” 菊づくりでは“肥料抜き” “チッ素抜き” または“肥料を食わせる” などと言っています。

追い込み後のチッ素過剰の状態は様々で“茎葉にチッ素分を残したもの” “さらに培養土にもタップリとチッ素分を残したもの” など程度はいろいろです。

この違いを考えないで、同じ方法で肥料調整を行っても思うようになりません。

問題なのは培養土に肥料を残したものです。

この状態では元々肥料調整が簡単にできるものではありません。

肥料調整剤を与えても次々と培養土に残ったチッ素分を吸い上げてくる為に、肥料調整は一向に進みません。

この場合の肥料調整は培養土に残っているチッ素分を先に除去した後に、茎葉に残っているチッ素分を消化させる方法をとらないと、効率のよい肥料調整はできません。

考えなければならないのは肥料調整は開花の始まる前（9月末くらい）に終了しておく必要があるからです。

肥料調整は「時間との戦い」と言う側面も忘れてはなりません。“菊の生長”と時間は「待ったなし」です。

土に残れば肥料除去、茎葉なら肥料調整 この考え方が効果的かつ合理的

肥料調整は9月中旬～下旬にかけて行います。

「止め肥」「追い込み肥」以後は、葉色が濃くなったり、葉のフチが波打ったり、肥料が多すぎ、チッ素過剰気味になっています。

この程度なら肥料調整で消化させ解決できます。

しかし、葉色が異常に濃い緑になったり、葉が巻いてきたりする場合はチッ素分が過剰に土に残っていると判断できます。この様な状態の場合は培養土の肥料除去（エヌトールを使用）し、培養土の肥料濃度を適正に改善してから、葉茎の肥料調整をする方が効率よく確実に最適な肥料調整ができます。肥料調整は「P.Kマグ」（大サジ山一杯 15～20グラム）を

表土になるべく広い範囲にバラまき、軽く土をかぶせま（土をかぶせないで効き目が悪い）2～3回を9月中旬～下旬にかけて行います。

培養土に肥料が残っていると思われる場合は、エヌトール（ランドライフ）を500倍にうすめ、通常の水掛けの2倍程度（9号鉢で2～3リットル）掛け流し肥料除去をします。さらにその後水を最低2～3リットル、土を洗い流す気持ちで掛け流します。（エヌトールで土から肥料を切り離し、水で洗い流す）

培養土の肥料除去が終わったら「P.Kマグ」を表土に散布し、軽く土をかぶせ通常の肥料調整をして、茎葉の保持しているチッ素分を消化させます。

“生長期の肥料の与え方” ここを変えれば 秋の肥料調整は らく・楽 終わる！！

肥料調整を難しくする最大の原因は肥料の与えすぎです。

定植時の乾燥肥料の（1合～2合など）入れすぎ、追肥の与えすぎにより多量にチッ素分をため込んでしまうことがあります。また、肥料成分を無視したチッ素分の多い肥料の使いすぎなども大きな要因となります。

さらには“葉が巻き気味”など、すでにチッ素過剰の状態である、などなどの生育状況は無視し、“追い込み肥”を与えるなど過度のチッ素過剰の条件を作り出してしまふ。こうしたことが原因となり、極めて難しい秋の肥料調整を強いられることとなります。

生長期の肥料の与えすぎは気付いた時に、即、肥料調整剤を与え、正常な生育状況にもどすことが極めて重要です。

“生長期の肥料の与えすぎは、秋に持ち越さない。”

こうした考え方が秋の肥料調整を円滑にし、優秀花を咲かせるコツです。

P.Kマグ 肥料調整剤

チッ素=0 リン酸=12
カリ=10 Mg=2

リン酸・カリ・カルシウム・マグネシウムの肥料です・

過剰なチッ素の消化を促し、花ぐさを予防し、さらに土の酸性化を改善します。開花期のみではなく、育苗から生長期全般につかえます。



おためしください。 優秀花の近道です。 他に選択の余地はありますか…

蕾の選定と大きさの調整方法 … そろった大輪の咲かせ方

大菊の芽先には通常5～6ヶの蕾がつきます。

真ん中の蕾が大豆くらいになり、正常と判断できれば側蕾を摘み取り花を咲かせます。

これが大菊の育て方です。

しかし、芯蕾が害虫の被害を受けたり、形が悪かったり、何らかの事故で使えなくなる事も起こります。

その為に予備の蕾を残しておき、芯蕾に異常がないことが確認できたら摘み取ります。

9月末を目安にひとつにし、10月10日くらいに甘皮が切れ、異常が無いことが確認できたら予備の蕾を切り取ります。

側蕾は一度にまとめて摘み取ることはしません。

栄養分が芯蕾に一気に集中する為、花卉や花の形が

乱れる為です。

こうした乱暴な方法は花の気品を落とす為に慎重に扱うことが重要です。

三本立て盆栽を育てる場合、天・地・人の蕾の大きさに違いが起こる場合があります。

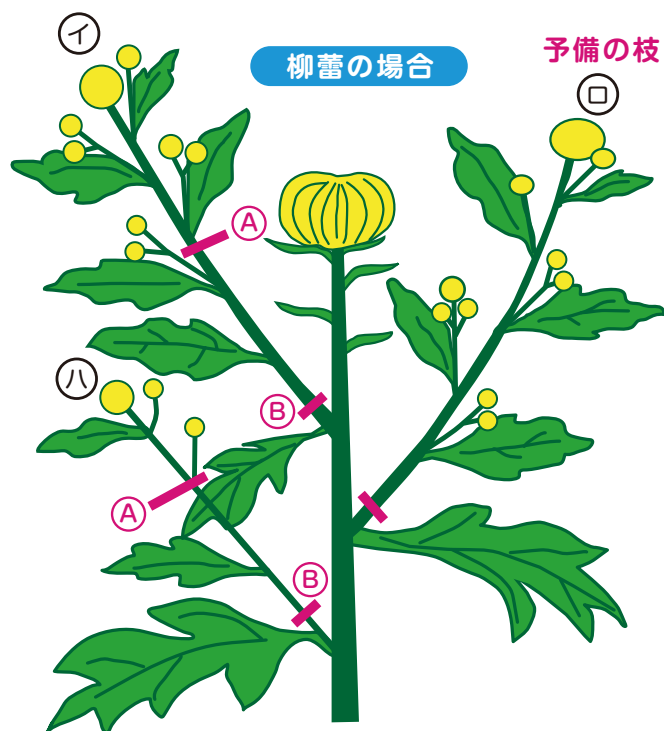
蕾の大きさをそろえることは、花の大きさに関係する為重要です。

芯蕾の肥大の調整は側蕾の摘み方により調整します。芯蕾に近い側蕾ほど芯蕾の肥大に強く影響を与えます。よって、一番近い側蕾を早く摘み取れば、芯蕾に栄養分が集中し肥大が早まります。

また残すことにより栄養分が分散され肥大は遅れます。

このようにして側蕾の摘み方により調整をします。

基本的な蕾の摘み方



柳蕾の場合

予備の枝

柳蕾の場合

- ① ①の側枝の(A)で切る。
- ② ①の側枝の(B)で切る。
- ③ ⑧の側枝の(A)で切る。
⑧の枝の(B)で切る。
- ④ ④は予備蕾として残す。
芯蕾の甘皮が切れ、すそ弁が
落ち始める頃切る。

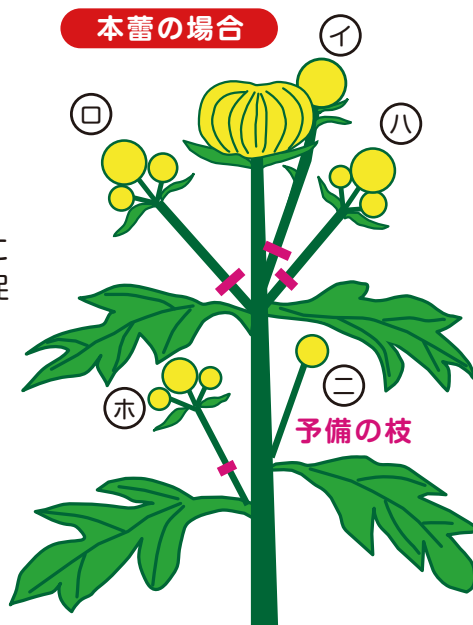
※ ①⑧の側枝は早めに切り栄養分を芯蕾に集中させ肥大を促す。

※ 予備の枝(蕾)は芯蕾に異常がないことを確認してから切る。

※ ①⑧の枝は一度に切らない。数日おきに切る。
一度に切ると栄養分の流れが、芯蕾に集中する為、
乱れの出る場合がある。
短い場合は一度に切り取る。

本蕾の場合

- ① 芯蕾と同位置についている。
①④⑧の側枝を切り取り芯蕾に
栄養分を集中させ芯蕾の肥大を促
します。
数日おきに切り取ります。
- ② ⑥の側枝を切り取ります。
- ③ ②は予備枝で残し、芯蕾の
異常の無いことを確認して
切り取ります。



本蕾の場合

予備の枝

盆養・花の大きさの揃え方

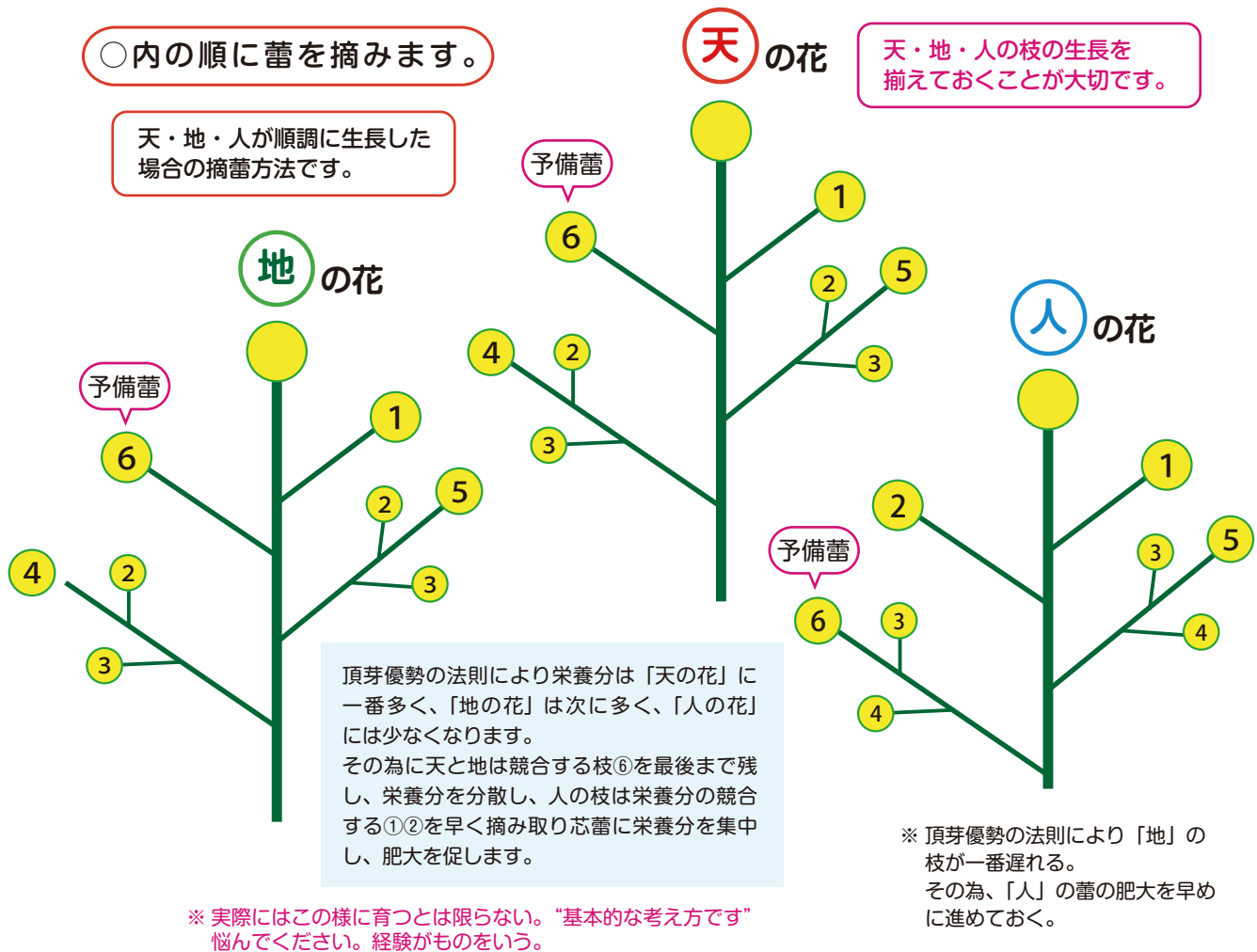
天・地・人の各々の花の大きさを揃えることなのか、
それとも視覚的に見た目のバランスを整えることなのか。

考え方は二つあると思います。

しかし、天・地・人の花の大きさを同じにすると、天の花は、後ろにある為、視覚的にはやや小さく見えます。
これを写真で撮影すれば一目瞭然です。

天の花は地と人の花より少し大きく咲かせないと同じ大きさには見えません。

菊つくり名人と呼ばれている方の“私の菊つくり”の記述中にこれを想定される“摘蕾法”がありましたので紹介いたします。参考になるとと思います。



鬼蕾

大きくなると...



- 長日条件で（13 時間以上）花芽ができ正常に生長すると、鬼蕾となります。
- しばらくすると、ガクの発達した勢いの強い蕾となる。柳芽の数が増える。
- 柳蕾となってしまった場合はなるべく早く切り取り立て替える。

エヌトール



エヌトールはチッ素の他、カリ、カルシウムなど同時に流し落とします。
その為、不足することも考えられます。
“P.Kマグ”はリン酸・カリ・カルシウム・マグネシウムの肥料です。チッ素を消化させると同時に、これらの不足しそうな成分の補給を同時に行います。
エヌトールを使用した後には必ず使用したい肥料です。

追い込み肥の与え方・考え方

“追い込み肥”は夜温の下がる9月初めから2週間を目安に行います。充実した木つくりと大きな花を咲かせる為です。

追い込みはどの株でも一律に行うものではありません。根張りが充分で根いたみなどがなく、元気な株のみです。さらに“葉が巻いたり”“葉色が異常に濃く”チッ素の多すぎる場合も追い込みはできません。

追い込みに使用する肥料はアミノ酸を多く含む液体肥料（アミノP.K、又はみらい）が多く使われています。

500～1000倍で一日おきに7～8回使用します。

その後、肥料調整に入ります。

追い込みに入る前に、（8月下旬）葉色の濃く、チッ素が少し多すぎていると思う株には、肥料調整剤（P.Kマ

グ）を大サジ山1杯（15～20グラム）を全面にバラまき、その後で追い込みを行います。

さらにチッ素が多く残っていると思われる株はP.Kマグ大サジ1杯を全面にバラまき、軽く土をかぶせます。

（P.Kマグが見えなくなる程度）

これを2～3回、5日おきにくり返し過剰なチッ素分を消化させます。

こうすることで、充実した木つくりとなり、追い込みと同じ効果を得ることができます。

追い込みが終了したら肥料調整に入ります。

チッ素分が消化され、葉っぱが正常に戻ればアミノPK、又はみらいを1000倍で適宜与え蕾の肥大を促します。

増し土

9月中旬になると“花を咲かせる”為の力強い根が株元から発生してきます。これが“上根”です。

すでに培養土中には根が張り、満杯状態になっている為、根が伸びるスペースが少なくなっています。その為の根の張るスペースを作るのが増し土です。

花を大きく咲かせる為には欠かすことはできません。

また、冬至芽の発生を良くし翌年の優良苗つくりにも大切な働きをします。

増し土は、カリ分を多く含むモミガラくん炭を多めに配合します。

増し土は一度に必要なだけまとめて（2～3センチと言うような）置くことはしません。1センチくらいずつ数回に分け、根の環境変化が緩やかに進むように置きます。

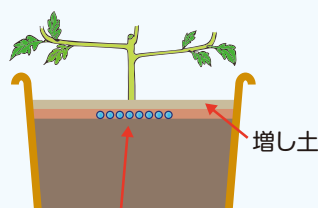
“根いたみや根の働きに急激な変化”を与えないようにします。（増し土は、カリ分を多く含み、花の色を濃くし、花の日持ちがよくなる「菊養土増し土」がおすすめです）



ネフレッシュを使った増し土の方法

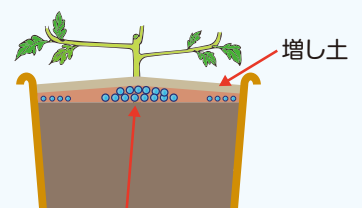
遠赤外線を発生する資材でよく健康器具や水道水の活性化などに使用する資材です。遠赤外線の活性効果で“発根力”を高め、根の働きをよくします。

増し土スペースが充分にある場合



ネフレッシュ
株元に散布。
数回に分けて置く。

増し土スペースが少ない場合



ネフレッシュ
株元に厚く、
鉢フチはうすく置く。

過マンガン酸カリウムを使用した肥料調整法??（おすすめしません）

コレも肥料調整ですか??

肥料調整と称して、過マンガン酸カリを使用する愛好家の方がいますが、これは肥料ではありません。

非常に強い酸化剤で、使えば“根をいためる”ことになります。

うすい倍率で使用し“軽度の根いたみ”を起こさせ、根の働きを一時的に止めて“肥料の吸収を止める”作用をしています。

よほど熟練しないと本物の根いたみとなり、大失敗につながることにかなりかねません。

これは一般的におすすめできる肥料調整法ではありません。

お申込み・お問い合わせは

ウチダケミカルコーポレイション

Tel.029-869-1777 Fax.029-869-1666

〒300-4204 茨城県つくば市作谷1711-12 郵便振替 00820-6-96628